

格フィルターと存在文

山本久雄

1. 序

一般に、文法範疇は大きく語彙範疇と機能範疇に分けられる。名詞(Noun)は前者に属し、その投射範疇である名詞句(Noun Phrase, NP)は、文中の様々な場所に出現する。近年、名詞句は決定詞句(Determiner Phrase, DP)として再分析されているが、ここでは名詞句扱いとする。これら名詞句の生起はどのように認可されるのか。本論文は、その名詞句認可の条件を考察するものである。第2節以降では、主として英語存在文における名詞句認可のプロセスに焦点をあてるが、序節では、それ以外の構文で見られる名詞句表現に言及する。

例文(1)で、名詞句は、主語、動詞(Verb, V)及び前置詞(Preposition, P)の補部位置を占めている。

(1) The boy met the girl in the park yesterday.

これらの場所は名詞句出現の典型的な位置と言われているが、(1)には、さらにひとつ注意すべき点がある。文末の語 yesterday は名詞句か否かという問題である。もし前者ならば、(1)の文には、合計4カ所に名詞句が存在することになる。それらを認可する要因は何か。格理論がその手がかりを与えてくれる。

Chomsky (1981) は、その一環として、格フィルター(Case Filter)を提案する。それによれば、音形を持つ名詞句はすべて格を持たなければならないことになる。このフィルターを(1)に適用し、かつ yesterday を名詞句と仮

定した場合、文中の4名詞句は格の所有を要求されることになるが、それは可能であろうか。格付与者は[-N]素性を持つ語彙範疇及びInflであり、格付与は統率(government)のもとで行われる。故に、(1)で、the boyはInflにより主格を、the girlはmetにより目的格を、the parkはinにより同じく目的格を与えられる。yesterdayに関しては複数の可能性が考えられる。前述の如く名詞句と見做すならば、それを統率する格付与者は存在せず、その生起は許されないことになる。Inflはyesterdayの格付与候補者と考えられ得るが、Inflは主語名詞句に格を付与する任務を有するということ、同一格付与者による複数の格付与の禁止等により、この可能性は排除される。その結果、yesterdayは格を付与されず、(1)は、事実を反し、非文法的となるはずである。yesterdayの名詞句分析を維持する立場を取るならば、どこにこの問題の解決方法が見出せるであろうか。Chomsky(1986)は、格付与を、主題役割付与に対する可視性条件(Visibility Condition)として定義し直した。これに従えば、yesterdayは項(argument)ではなく付加詞(adjunct)の機能を果たしているため、主題役割付与とは無関係となり、格問題は生じない。

他の可能性は、yesterdayを名詞句ではなく副詞句(Adverb Phrase, AdvP)と分析することである。この場合、一種の転向(conversion)操作により、名詞から副詞への範疇変化が起きたものと考えられる。もしこれが正しいとすれば、格フィルターはyesterdayを除く名詞句に適用され、(1)は文法的となる。いずれにしても、項と格とが相互に関係しあう限り、付加詞として機能するyesterdayタイプの語は、名詞句と分析されようが格フィルターの範囲外ということになり、名詞句認可の問題には含まれない。

次に(2)の文を見てみよう。ここでは、動詞句の主要部(head)は連辞(copula)のbeである。

(2) John is a doctor.

連辞beの後位置も名詞句出現の代表的な場所である。この位置を占めるa

doctor は、いかにして格フィルターを満たすのか。先ず注目すべきは、be が a doctor に格を付与するかどうかの可能性である。Belletti (1988) 及び Lasnik (1992, 1995) は、be は部分格 (partitive case) を後続名詞句に付与すると主張する。しかも、彼らによれば、この格は構造格ではなく内在格である。この考えが正しければ、a doctor は is により (部分) 格を与えられ、格フィルターには抵触せず、(2) は文法的となる。しかしこれには問題がある。内在格は主題役割付与と密接に関係し、主題役割付与者とその主題役割受領者間でのみ成立する格である。(2)において、is が a doctor に (何らかの) 主題役割を与えているとは思われない。例えば、a doctor は、is の行為者としての、主題としての、起点としての解釈が可能であろうか。いずれも否と思われる。むしろ、主語名詞句 John が項であり、a doctor はその主題役割付与者である可能性が高いように思われる。従って、is は a doctor の格付与者であるという考えは支持し難いことになる。残る可能性は、連辞 be の後続名詞句を項ではなく述語 (predicate) と見做すことである。(1)に関連して述べたように、格フィルターを主題役割付与に対する可視性条件と再定義するならば、(2)の a doctor は、項でない限り、格フィルターとは無関係となる。しかし、(1)の yesterday とは違い、付加詞とも見做し難い。また、主語 John と内包関係 (intensive relation) にあるという点において、John に主題役割を与える述語と考えるのが適切と思われる。故に、格フィルターは適用されず、述語という別の機能を果たすためこの名詞句は認可されることになる。因に、この提案のもとでは、be は小節 (small clause) を補部として取る繰り上げ動詞 (raising verb) の一種と見做されることになる。次節参照。尚、部分格理論に関しては Yamamoto (1996) を参照。

名詞句出現の構文として存在文を欠かすことはできない。(3)は英語の例である。

- (3) There is a book on the desk.

(3)は、連辞 *is* の後位置に名詞句が出現している点で(2)と似ている。前者において、もし *a book* が項であるならば、その名詞句は格を付与される必要があるが、後者に関して見たように、*be* は格付与能力を持たない繰り上げ動詞であるため、*a book* は *is* により格を付与されることはない。(3)が(2)と異なる点は、(2)の主語は語彙内容を持つ名詞句であるが、(3)の主語は語彙内容を持たない虚辞 (expletive) の *there* である。もし *be* の後続名詞句が、(2)と違い、存在文では項と見做されるならば、(3)の *a book* は格の保持が必要となる。いかなる方法が考えられるか。ひとつの手段として、連鎖 (chain) 形成による格転送が利用可能と思われる。*a book* は *there* と連鎖を形成し、*there* は主格付与の位置にあるため、この連鎖を通して格が付与される。その結果、*a book* は格フィルターを満たす。Chomsky(1986)を参照。しかし、(2)と同様、連辞 *be* が補部として小節を取る可能性を無視することはできない。その場合、*there* はもともと *a book* の外項であり、派生の中で主節主語の位置に移動したものと考えられる。このとき、*a book* は項ではなく述語として認可されることになる。これは次節で取り上げる Hazout (2004) の主張である。第2節でその主旨を紹介し、第3節ではその問題点及び可能な解決法を提案・示唆する。第4節は結びである。

2. 述語分析

前節では、音声的に具現化された名詞句の認可条件として格フィルターに言及した。しかし、さらに考慮すべき要件がある。当該名詞句が論理形式 (Logical Form, LF) で適切な解釈を受けることができるかどうか、即ち Chomsky (1986) で提唱される完全解釈の原理 (Full Interpretation Principle, FIP) を遵守するかどうかである。この場合、名詞句が満たすべき適格性の条件が格及び主題役割の所有であるとするならば、前節の(1), (2), (3)で言及したそれぞれの名詞句はこの条件を満たしているのか、換言すれば、FIP を遵守しているかどうか検討しなければならない。主題役割並びに格の所有

がいずれも項に課される条件と見做すならば、付加詞または述語として機能する名詞句は FIP とは無関係となる。故に、(1)及び(2)の文中に存在するすべての名詞句は FIP に違反しない。主語名詞句は、主格を Infl から、主題役割をその述語から付与される。動詞句及び前置詞句の補部名詞句は、その主要部動詞及び主要部前置詞から主題役割と目的格を付与される。問題が生じるのは存在文に生起する名詞句の場合である。(4) (= (3)) の文を見てみよう。

(4) There is a book on the desk.

FIP の対象となるのは主語名詞句 *there* と後連辞位置名詞句の *a book* である。非述語分析では、後者の名詞句は項の地位を持つことになるであろう。(付加詞の可能性はないと思われる。) 連辞 *is* は非格付与者であるとするれば、*a book* はどのように格を付与されるのか。前節で紹介した連鎖分析がその候補のひとつとなる。連鎖先頭要素 *there* からの格転送操作により FIP を満たす。主語名詞句そのものについてはどうか。*there* も、名詞句として扱われるならば FIP に従わなければならない。格保有に関しては問題ない。主題役割付与はどうか。連鎖メンバーの *a book* が項であることを思い出せ。*there* は虚辞として意味内容は持たないが、主語の位置、即ち外項の位置、を占めている。それは、FIP に基づけば、何らかの主題役割を担うことを意味する。この場合、格転送とは逆に、*a book* から *there* に主題役割転送が行われると考えられる。虚辞とその連鎖要素 (associate) から成る連鎖分析は、この点で FIP を遵守する。他方、後連辞位置名詞句を述語と見做す分析では、(4)の *a book* に問題は生じない。項としての地位を持たない以上、格及び主題役割に関する適格性の条件は適用されず、異なる立場で、即ち述語名詞句として、FIP に従うことになる。ただ、主語名詞句 *there* は適格性の条件を満たさなければならない。*there* は、*a book* の項と解釈されるからである。格条件は問題ない。Infl により主格を付与されるからである。主題役割付与はどうか。述語分析は、虚辞と連合要素との連鎖は想定しない。故に、転送による主題役

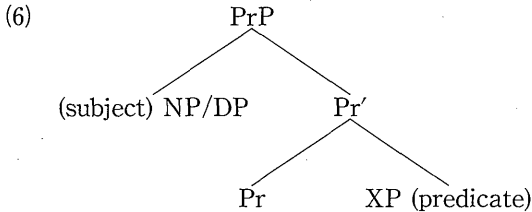
割付与は不可能である。a book が there に主題役割を与えると考えられるが、there はそのための語彙内容を持たない。“虚辞”たる所以である。しかし、項である以上、この問題を解決しなければ、存在文は FIP 違反となり非文法的と予測されてしまう。以下で、述語理論は、存在文をどのように分析し、この問題をいかに解決するのかを見る。

Hazout (2004, p.395) は、(5a, b) のような文に生じる疑問を基に存在文の分析に着手する。

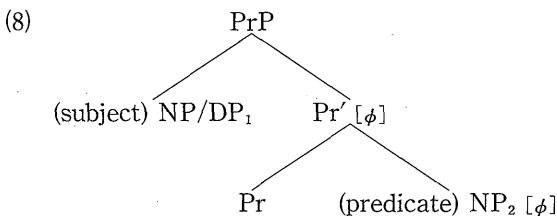
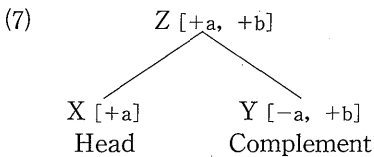
- (5) a. John and Bill are *students in this class*.
 b. There are *students in this class*.

(イタリックは原文通り。) (5a) は、主語に意味内容を持つ語彙項目を持ち、(5b) は、虚辞の there を主語に持つ。それ以外はすべて同じ語が使用されている。故に、主語に生じるこの違いは不可思議ということになる。Hazout (2004) は、(5a) のような語彙内容名詞句主語文に対し述語分析を提案する。連辞 be は補部として小節を取り、その小節内の主語名詞句が主節の主語位置に移動すると考える。(5b) の存在文に対しても同様の分析を試みる。名詞句 *students* は述語であり、there はその主語である。後者は最終的に主節の主語位置に繰り上がる。以上、まとめれば、be は補部として小節を取る繰り上げ動詞であり、後連辞位置名詞句は、主節主語と主語-述語関係を結び、それは存在文においても同様であるということになる。また、Hazout は、連辞以外の動詞存在文にも同じ分析を適用する。この時点で問題となるのが、前述した主語 there と FIP との関係である。there は後動詞位置名詞句の主語である。それは、there が、FIP に従い何らかの方法で解釈に関与しなければならないことを意味する。しかし、虚辞である以上、主題役割そのものが与えられるかどうかの問題となる。Hazout (2004, p.403) は、完全解釈の概念を一般化させ、それを基に θ -基準を簡潔化する。これに従えば、すべての名詞句は、ある動詞（または述語）と“項関係”を結ぶことで解釈を受けたこ

とになる。故に、存在文の主語名詞句 *there* は、後動詞名詞句の“項”であるという関係を通して FIP を満たすことになる。連辞存在文も同様である。Hazout (2004, p.404) は、この小節に対し(6)の構造を提案する。



PrP は述語句 (Predication Phrase) であり、Pr はその主要部である。さらに、Hazout (2004, p.407) は相対的主要部 (relativized head) 概念を用いる。これによれば、絶対的主要部 (absolute head) がある素性に対し指定を受けないとき、補部が相対的主要部となる。その相対的主要部の素性が上昇浸透される。(7)はその図式であり、(8)は述語句への適用結果である。



主要部 Pr は ϕ -素性を指定されないと仮定することにより、述語名詞句 NP_2

の ϕ -素性が上昇浸透する。名詞(従って名詞句)は ϕ -素性指定を受ける唯一の語彙範疇である。PrP 内で主語 NP₁ と Pr' は姉妹関係を通じて主語-述語関係を成立させる。故に、通常存在文で見られる一致関係が説明できる。さらに、Hazout (2004, p.409) によれば、名詞句認可原理 (NP-Licensing Principle) が重要な役割を果たす。これは、2 通り以上の方法による名詞句の認可を禁じたものである。また、Hazout は、虚辞構文において、there は名詞句と、虚辞 it はそれ以外の範疇と共起するという事実を下位範疇素性にに基づき説明する。

(9) a. there の下位範疇化: [____ Pr' [+agr]]

b. it の下位範疇化: [____ Pr' [-agr]]

(10) a. There/*It is [a problem].

b. It/*There is [so dark (in the room)].

(10)のカッコは原文通り。) 連辞以外の存在文 (例えば arrive タイプの動詞存在文) に対する Hazout (2004, pp.416-417) の説明は次の通りである。

(11) There arrived [a man from New York].

(11)のカッコは原文通り。) (11)において、後動詞名詞句は arrived により主題役割を付与される。この名詞句は、また、there の述語となる。これは、項が同時に述語の機能を果たすという点で意味的に問題があると思われるが、there との主語-述語関係はあくまで形式上の関係であり意味解釈には関与しないと Hazout は主張する。

以上、存在文の述語分析の例として Hazout (2004) の考えを紹介した。しかし、この分析も無条件に支持され得るわけではない。ただし、述語理論には、これまで議論されてきた問題点のいくつかを処理することができるとい

う利点もあり、Hazout の分析に生じる問題が解決され得るならば、この理論も維持する価値があると思われる。次節でこの問題点及びその解決法に触れる。

3. 述語分析の問題点

前節で、存在文分析の一例として Hazout (2004) の述語理論を見た。この考え方は、虚辞とその連合要素から成る連鎖、あるいは LF での再構築等の道具立を必要としないという点では好ましいとも思われる。しかし、問題がないわけではない。本節では、この述語分析に関する問題点を指摘しかつそれに対する解決法を提案することで、その理論的価値を維持する可能性を探る。

本論第2節で述べたように、Hazout (2004) は、機能範疇 Pr を導入し、連辞 be の補部小節はこの投射 (PrP) であると主張する。さらに、Pr は ϕ -素性に対し無指定であると仮定する。しかし、この仮定はいかなる根拠を基に支持され得るのか。Chomsky (2000) は、同じ機能範疇である C, T (本稿では Infl), 及び v (軽動詞) は ϕ -素性指定を受けると仮定している。共に機能範疇でありながら Pr は ϕ -素性無指定であると仮定する根拠を Hazout は提示していないが、次のような可能性を示唆することができると思われる。C は that, for, if として、T (または Infl) と v は動詞上に、語彙的音声化を受ける範疇である。故に、形態上の具現化に必要な素性として ϕ -素性指定を受けると仮定することは妥当であろう。主要部 Pr が、この意味で、語彙的具現化を受けることはない。従って、Pr が ϕ -素性に対し無指定であるという仮定も支持し得るものとなる。

Hazout (2004) によれば、存在文主語の there は小節の主語であり、移動により表層の位置を占めることになる。この操作の引金となるのは素性の照合及び格の付与である。これは、格は素性照合ではなく付与操作であることを意味する。近年の最小主義者プログラム (Minimalist Program) の主張のひとつに、格付与は格素性照合操作であるという考え方がある。仮に、格を

付与ではなく照合と見做した場合、Hazout の there-移動分析に問題はないのであろうか。Hazout は、there は (ϕ -素性のうち) 人称に対しては三人称として指定されているが、数及び性に対しては無指定であると仮定する。また、Chomsky (2000) は、解釈不可能な素性の照合と消去には完全な ϕ -素性集合が必要であると議論している。Infl の ϕ -素性は解釈不可能素性であり、それ故、Infl の指定辞 (specifier) 位置に移動した there により照合・消去されなければならない。しかし、there は人称素性のみ指定を受けている。これは、その ϕ -素性が完全集合ではなく、そのため Infl の ϕ -素性が照合・消去されないことを意味する。この問題をどのように処理できるであろうか。Hazout (2004, pp.413-414) は、there は Pr' と融合 (Merge) したとき数と性の素性も指定されると示唆している。もしこの考えを採用するならば、融合が行われた段階で there の ϕ -素性はすべて指定を受け、主節の主語位置に移動したときには、there は完全 ϕ -素性集合を保有していることになる。このように、格付と理論ではなく格照合理論のもとでも、Hazout の there-繰り上げ移動には問題がない。ただ、注意すべきは、この格照合分析では、there は格素性を持つということ、Infl との照合関係においてこの格素性も照合され消去されるということである。

本稿前節で、Hazout (2004) は、虚辞の there と it の下位範疇化の違いを基に(10)の文法的対比を説明すると紹介した。これは、there は ϕ -素性指定をもつ名詞句のみを下位範疇化し、it はそれ以外、即ち ϕ -素性無指定の要素を下位範疇化するということと等しい。Hazout (2004, pp.418-419) はこの枠組を用い(12)を説明する。

- (12) a. *There seems that a man is in the room.
 b. It seems that a man is in the room.

しかし、上述したように、Chomsky (2000) は C を ϕ -素性指定範疇と見做す。もしそれが正しいければ、CP も同様の指定を受けることになる。その結果、(12

b)で、itは ϕ -指定範疇CPを下位範疇化することになり、Hazoutの仮定と矛盾するのではないかという疑問が生じる。ただし、ここでの ϕ -素性指定範疇をあくまでも語彙範疇に限定するならば、thereの下位範疇化枠は名詞句のみが与えられ、それ以外の ϕ -素性無指定の語彙範疇及び機能範疇はitの枠に与えられることになり、下位範疇化に基づく(12)の説明は維持できるように思われる。

最後に、不定詞構文を含む存在文に目を向ける。Hazout (2004, p.421)は次の例文を取り上げる。

- (13) a. There is likely to appear *a man*.
 b. *A man* is likely to appear.
 c. *There is likely *a man* to appear.

((13)のイタリックは原文通り。) Hazoutによれば、(13a)の*a man*は格を付与されず、名詞句認可の原理に従い述語として機能する。(13b)で、*a man*は、(13a)と同様格を付与されないが、格付与位置に移動することにより格問題を回避する。(13c)では、*a man*は、格を付与されず、また述語として機能し得る位置も占めていないため名詞句として認可されない。故に非文法的となる。前述したように、Hazoutの重要な理論背景のひとつは、格は照合ではなく付与であるという考え方である。しかし、一方で、照合理論を主張する文法家も少なくない。それ故、再度、格照合理論を仮定した場合、Hazoutの分析がどうなるか検討する。(13a)で、*a man*は述語として機能する。述語であるということは、(照合理論のもとでは)構造格素性に対し指定を受けないということになる。(13b)で、*a man*は、逆に構造格素性を指定され、その素性の照合・消去を受けるため主節主語の位置に移動する。(13c)において、*a man*は述語ではない。故に格素性指定を受ける。その結果、照合・消去が必要となるが、それが可能な位置を占めていない。従って、LFで派生は破綻 (crash) し、非文法的となる。

ここで、“指定”に関して少し言及してみよう。そもそも指定・無指定とはいかなる意味であろうか。仮に、指定を“所有”，無指定を“非所有”と解釈する。(13a)で、a man は、構造格素性を所有しないまま数え上げ (numeration) に列挙されることになる。このときの可能性は2つ。ひとつは、there が同じ数え上げのメンバーとして選択され、Pr' と直接融合される場合である。このとき、a man は、格素性を持たないため述語と解釈され、名詞句認可の原理に従い述語として機能する。次に、there が数え上げの中に列挙されていないと仮定する。PrP 内の主語位置で顕在的語彙項目は純粹融合されないことになる。仮に、a man がこの位置で融合操作を受けたとするならば、a man の述語として機能する要素がゼロとなり、小節の形成が不可能となる。故に、a man は、小節内の述語位置から (PrP の指定辞位置を経由して) 主節の主語位置に移動しなければならない。さもなければ拡大投射の原理 (Extended Projection Principle, EPP) に違反する。しかし、a man は構造格素性を所有していないという仮定のため、この名詞句を活性化させる要素が存在しないことになる。従って、この前提のもとでは、(13a) は主語が空のままとなり非文法的となる。故に、a man に対し構造格素性が指定されないときは there の生起が必要となる。

逆に、a man が格素性を所有すると仮定してみよう。there が数え上げに列挙された場合、a man は格照合位置に移動しなければならない。経済性の原理に基づき融合は移動よりも優先されると考えるならば、there は PrP 内で純粹融合されることになる。この there が介在するため a man は主節の主語位置には移動できず、解釈不可能素性が消去されないままになる。仮に、直接主節の主語位置に移動することにより a man はその格素性を消去したとしても、there の格素性が照合・消去されないままになる。there は名詞句でありまた主語の位置を占めているため述語ではない。むしろ項として機能し、同時に、格素性の保持並びにその照合・消去が要求されるからである。他方、there が数え上げで選択されない場合には、a man は、最終的に主節の主語位置に移動しその素性を照合・消去される。(13b), (13c) においても同様の説

明が成り立つ。格素性の“指定”分析のもとでも、Hazout (2004) の述語理論は正しい派生を導くことができる。

さて、格指定はいつ行われるのであろうか。語彙部門で語彙項目が選択される時、格素性の指定を受けて選択されるのか、あるいは未指定のまま選択されるのか。前者の場合、上述したように様々な派生が可能となり、その都度最適な派生を決定することになる。後者の場合はどうか。名詞（従って名詞句）は、仮に認可素性と呼ぶ $[\alpha\text{Prd}]$ 素性を値が未決定のまま所有すると仮定する。この素性は、派生の段階で、主語－述語関係が成立したときには $[+\text{Prd}]$ となり、格とは無関係になる。他方、指定辞－主要部関係が生じたときには $[-\text{Prd}]$ の値を取り、構造格素性の性質を担うものと解釈される。これに従えば、認可素性が $[+\text{Prd}]$ と指定されない限りそれが名詞句を活性化させ移動の引金となる。これは、格素性の値は未決定でありプローブ (probe) により決定されるという Chomsky (2001) の考え方と部分的に通じるものがある。また、Hazout (2004) の述語分析をも同時に取り入れることで、この認可素性の仮説は、存在文のより適切な分析を可能にすると思われる。

4. 結論

本論文では、格フィルターを基に、名詞句表現の分布問題、特に存在文における虚辞主語と後連辞名詞句の分析に焦点をあてた。このとき、2つの考え方を紹介した。ひとつは、後連辞名詞句は格素性を有し、主節 Infl との格照合関係に関与するというものであり、他の提案は、当該名詞句は述語であり格とは無関係であるという主張であった。後者に従えば、連辞は、補部小節を取る繰り上げ動詞ということになる。Hazout は、この考えを支持する様々な証拠を提示し述語分析の妥当性を議論する。しかし、その主張にもいくつかの問題点が見られたが、本稿第3節でその解決法を示唆することにより述語分析の支持を試みた。最後に連辞の格付与能力について一言述べる。

後連辞名詞句は、(英語では)目的格として具現化されることがある。この位置に代名詞表現が現れる場合、それが明確に示される。

(14) It is me.

(14)において、目的格の出現をどのように考えればよいか。ひとつの考え方は、連辞 be は、他動詞として後続名詞句に構造格を与えると仮定するものである。この場合、be は繰り上げ動詞とはならず、主節主語と me は基底で小節を形成しない。換言すれば、be は補部として小節を取らないことになる。これは駆流 (drift) と呼ばれる現象の一例と解釈されるかもしれない。もしこの仮定が正しければ、存在文における述語分析も大幅な見直しが必要となる。紙面の都合上、連辞の格問題にはこれ以上触れず、連辞の繰り上げ動詞説及び存在文の述語分析を支持するものとして本稿を終える。

参考文献

- Belletti, A. (1988). "The Case of Unaccusatives." *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York, Praeger.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. MIT.
- Chomsky, N. (2000). "Minimalist Inquiries: The Framework." *Step by Step*. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.), 89-155. MIT.
- Chomsky, N. (2001). "Derivation by Phase." *Ken Hale*. Michael Kenstowicz (ed.), 1-52. MIT.
- Hazout, I. (2004). "The Syntax of Existential Constructions." *Linguistic Inquiry* 35, 393-430.
- Lasnik, H. (1992). "Case and Expletives: Notes toward a Parametric Account." *Linguistic Inquiry* 23, 381-405.
- Lasnik, H. (1995). "Case and Expletives Revisited: On Greed and Other Human Failings." *Linguistic Inquiry* 26, 615-633.
- Yamamoto, H. (1996). "Partitive Case Theory and the Minimalist Program." *The Review of Liberal Arts* 92, 143-160.